



開館15周年記念

現在地:
未来の地図を描くために

現在地[1]

2019年9月14日(土)
～12月19日(木)

現在地[2]

2019年10月12日(土)
～2020年4月12日(日)

展覧会名	開館15周年記念 現在地:未来の地図を描くために
会期	現在地[1] 2019年9月14日(土)～12月19日(木) 現在地[2] 2019年10月12日(土)～2020年4月12日(日) ※会期中に展示替えあり 前期:2019年10月12日(土)～12月19日(木) 後期:2020年2月4日(火)～4月12日(日)
休場日	毎週月曜日(ただし、9月16日、23日、10月14日、28日、11月4日、2020年2月24日は開場)、 9月17日、24日、10月15日、11月5日、12月20日～2020年2月3日、2月25日
開場時間	10:00～18:00(金・土曜日は20:00まで) ※チケット販売は開場の30分前まで
会場	現在地[1] 金沢21世紀美術館 展示室7～14、交流ゾーン 現在地[2] 金沢21世紀美術館 展示室1～6、長期インスタレーションルーム、交流ゾーン
料金	●「現在地[1]」観覧券 一般:1,200円(1,000円)、大学生:800円(600円)、小中高生:400円(300円)、65歳以上の方:1,000円 ※この観覧券で現在地2[2019年10月12日(土)～12月19日(木)]にもご入場いただけます。 ●「現在地[2]」観覧券 一般:450円(360円)、大学生:310円(240円)、小中高生:無料、65歳以上の方:360円 ●「粟津潔展」と「現在地[1]」との共通観覧券[9月23日(月・祝)まで] 一般:2,000円(1,600円)、大学生:1,400円(1,100円)、小中高生:700円(600円)、65歳以上の方:1,600円 ※()内は団体料金(20名以上)及び前売り券の料金 ※現在地2の前売り券はありません。 ※市民美術の日(オープンまるびい2019):11月3日(日・祝) 金沢市民及び富山市民の方は「現在地1」「現在地2」を無料でご覧いただけます。(要証明書) ※美術奨励の日:10月12日(土)、11月9日(土)、12月14日(土)、2020年2月8日(土)、3月14日(土) 金沢市民及び富山市民の方は「現在地2」を無料でご覧いただけます。(要証明書)
前売り券取扱い	●チケットぴあ TEL: 0570-02-9999 Pコード: [本展観覧券]769-694 ●ローチケHMV TEL: 0570-000-777 Lコード: [本展観覧券]54369 ●EVENTIFY(ファミリーマートグループ) ※ファミリーマート店内Famiポートにて直接お買い求めください。
主催	金沢21世紀美術館[公益財団法人金沢芸術創造財団]
お問合せ	金沢21世紀美術館 TEL: 076-220-2800

本資料に関する
お問合せ 金沢21世紀美術館
事業担当: 黒澤、中田、野中、山下、高橋(洋) 広報担当: 石川、落合
〒920-8509 金沢市広坂1-2-1
TEL 076-220-2814 FAX 076-220-2802
http://www.kanazawa21.jp E-mail: press@kanazawa21.jp



展覧会概要

コレクションを通して捉える、「現在地」

今年10月、金沢21世紀美術館は開館15周年を迎えます。2004年の開館からこれまでの間、同時代に生きる作家の作品や活動を取り上げ、世界の「今」を見つめ、芸術表現の調査研究、展示公開を通じて、その豊かさや可能性を知るべく、芸術的考察に取り組んできました。展覧会はもちろんのことですが、美術館の核を成すコレクション（収蔵品）の構築は、金沢21世紀美術館がどのような「美術館」であるかを示すものとして、もっとも重要な美術館活動として取り組んできています。

展覧会「現在地：未来の地図を描くために」は、美術館のコレクションを中心に、私たちの未来を見つめるために立つ、今ここを「現在地」として、時代と共に歩む、作家による世界への眼差しを捉えて紹介するものです。開館からわずか15年間ではありますが、世界では加速度的に変化していくようなさまざまな出来事がありました。その間に収集した約4,000点に及ぶ作品の数々は、20世紀終わりから21世紀の今日までについて、芸術的なアプローチから語るすることができます。

開館当初のコレクション作品を俯瞰^{ふかん}して導いた「移動・横断」「非物質性」「協働・参加」「生成・生態」「日常性・個別性」「引用・複製」という6つのキーワードは、今日において少しずつその意味が変容しています。人々の移動はますます常態化し、生き物の細胞レベルまでデザインや編集が進む世界に生きる表現者たちは、どのような未来の地図を手に入れて進んでいくのでしょうか。現在地 [1] (9月14日～12月19日) においては約50作家の約70作品を、現在地 [2] (10月12日～2020年4月12日) においては約60作家の140作品をご紹介します、芸術によって認識する、私たちそれぞれの現在地を明らかにしていく機会としたいと考えています。

黒澤浩美 (チーフ・キュレーター)

展覧会の特徴

開館以来、15年ぶりに展示公開する作品や、収蔵後に初めて公開する作品

金沢21世紀美術館がこれまで15年の間に開催してきた展覧会において、話題になった作品が再びお目見えします。現在地 [1] ではエルネスト・ネト《身体・宇宙船・精神》、現在地 [2] ではマチュー・ブリアン《SYS*017.ReR*06/PiG-EqN\15*25》、クリス・バーデン《メトロポリス》など、話題を集め人気となった作品に出会えます。また、同じく現在地 [2] に出品される田中敦子《作品》(1968年)、小谷元彦《ドレイブ》(1998年)、西山美なコ《Untitled (PW-970508)》(2000年)など、収蔵後に初めて公開するコレクション作品もあります。



エルネスト・ネト《身体・宇宙船・精神》2004
金沢21世紀美術館蔵
© Ernesto NETO
photo: FUKUNAGA Kazuo

世界的に活躍する作家の作品を多数紹介

当館は開館前の2000年から20年にわたり約4,000点の作品をコレクションしてきました。

現在地 [1] ではコレクション作品を軸にしなが招待作家の作品も交えて紹介します。当館では初展示となるエリアス・シメ、ジュディ・ワトソン、ムン・キョンウォン&チョン・ジュンホやティファニー・チュンといった世界の第一線で活躍している作家による作品も合わせ、現在を確認し未来を描く指針とするものです。演劇ユニットPort Bを主宰する高山明が、世界各所にあるマクドナルドを大学に見立て、知のベルトを創出しようという壮大なプロジェクト《マクドナルドラジオ大学》が登場します。また、ゲームの分野で発展する思考や感覚の拡張やネットワークング、バイオテクノロジーに言及するアートなど、実験的・先駆的な作品を紹介します。

現在地 [2] では、当館コレクション作家の塩田千春（後期）と照屋勇賢が当館の展示空間に合わせて新作を発表します。毛利悠子（後期）は交流ゾーンの空間に合わせた新作、ミヤギフトシ（後期）は当館コレクション作品とのコラボレーションで構成する新作を展示します。

工芸都市金沢ならではの作品が一つの展示室に集結

2009年にユネスコ創造都市にクラフト分野で認定された金沢は、数多くの伝統工芸が現在も人々の暮らしに息づいています。**現在地 [2]** では当館がコレクションする工芸作品を一つの展示室で多数展示します。「雲龍庵」北村辰夫や山村慎哉などの漆や貝を用いて制作される蒔絵や、大樋陶治斎（十代長左衛門/年朗）の大樋焼、見附正康や上出長右衛門窯+丸若屋らの九谷焼など、藩政期に石川県で始まった伝統的な技法を用いて制作される創造性に富む作品や、田嶋悦子や桑田卓郎など素材の可能性を追求し、工芸の領域を広げる独創的な作品など、歴史と伝統を重んじつつ、革新につなげようという精神を継承したコレクションをご紹介します。茶室をイメージした一角に茶道具を展示し、工芸品として実際に使用している様子がかいま見える展示も予定しています。

出品予定作家 (アルファベット順)

現在地 [1]

アーデル・アービディーン、BCL、オリバー・ピア、ツアオ・フェイ、ジャネット・カーディフ&ジョージ・ビュレス・ミラー、ティファニー・チュン、リジア・クラーク、ジョセフ・デラップ、ヘザー・デューイ=ハグボーク、オラファー・エリアソン、ギムホンソック、ドミニク・ゴンザレス=フェルステル、ステン・ハンソン、Hong Kong Cleanup、ホウ・イーティン、シュウ・ジャウエイ、ピエール・ユイグ、ヒワ・K、ミハイル・カリキス、川崎和也、風間サチコ、ディビット.S.コング、キュンチョメ、ミルトス・マネタス、マッシュヴ・アタック、シウド・メイレリス、ミヤギフトシ、M/M Paris、ムン・キョンウォン & チョン・ジュンホ、エルネスト・ネット、エルカン・オズケン、Playables (ミヒヤエル・フライ&マリオ・フォン・リッケンバッハ)、ペドロ・レイエス、ゲルハルト・リヒター、島袋道浩、エリアス・シメ、高山明、照屋勇賢、リクリット・ティラヴァニ、ドウ・ベイシー、和田淳、ブレント・ワタナベ、ジュディ・ワトソン、やくしまるえつこ、柳瀬安里、ヤン・ジェンジョン
※ディビッド.S.コングの作品は都合により出品されません。

現在地 [2]

安部泰輔、エル・アナツイ、青木克世、ベンアンドセバスチャン、マチュー・ブリアン、クリス・バーデン、スコット・チェイスリング、ピピン・ドライスデイル、ヤン・ファーブル、ヤン・フィシャル、シルバ・グプタ、橋本雅也、蓮田修吾郎、畠山耕治、葉山有樹、ホンマタカシ、家住利男、猪倉高志、板橋廣美、泉太郎、上出長右衛門兼+丸若屋、上出恵悟、金氏徹平、北出不二雄、草間彌生、桑田卓郎、久世建二、イ・ブル、前史雄、ボディル・マンツ、アナ・メンディエータ、見附正康、ミヤギフトシ、毛利悠子、中川衛、中川幸夫、中村錦平、中村信喬、中村康平、中村卓夫、中野孝一、奈良美智、榎原寛子、ヴァルター・ニーダーマイヤー、西山美なコ、野口春美、大場松魚、小谷元彦、扇田克也、十一代 大樋長左衛門 (年雄)、大樋陶冶齋 (十代 長左衛門 / 年朗)、沖潤子、奥村浩之、トーマス・ルフ、清水晃、塩田千春、曾根裕、須田悦弘、竹村友里、田中敦子、田中信行、田嶋悦子、寺井直次、照屋勇賢、三代 徳田八十吉、富本憲吉、塚田美登里、「雲龍庵」北村辰夫、山村慎哉、ヴラディミール・ズビニオヴスキー

※出品作家は変更になる場合があります。

現在地 [1]
展示構成

現在地—過去の参照と未来の創造

過去と未来という2つの時間の層は、必ずしも直線的なものとは限らず、ときに織物のように交錯する。ムン・キョンウォン&ジョン・ジュンホの《El Fin del Mundo》では、ある男性アーティストの活動を通して描き出される「過去」と、旧世界文明の調査に赴く女性を通して描き出される「未来」とが、左右2面のスクリーンに投影され、「未来」の女性は男性の制作した作品の痕跡を通して「過去」と接触する。この作品では過去を参照することと、未来を創造することが重層的に語られるが、我々が立つこの現在は、そうした2つの時間の層の織目であり、参照と創造の結節点となる可能性を秘めている。

出品作家：ムン・キョンウォン & ジョン・ジュンホ

展示室11



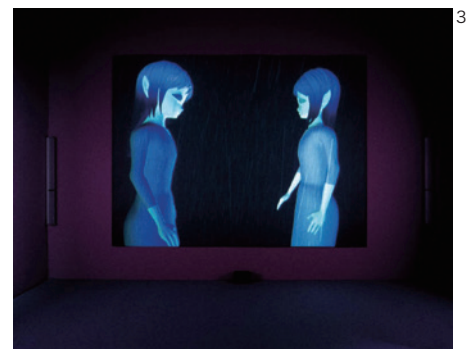
ムン・キョンウォン & ジョン・ジュンホ 《世界の終わり》2012
金沢21世紀美術館蔵
© MOON Kyungwon and JEON joonho

仮想空間に宿る命

フランスの芸術家ピエール・ユイグとフィリップ・パレーノが行った独創的なプロジェクト「No Ghost Just a Shell」の小特集。作家たちは、日本のデザイン会社から購入した「アン・リー」という架空のキャラクターを媒介に、複数の作家が無差別に協働する状況を作り出した。本小特集では、情報工学と生命科学が結びついた先にある「概念と生命が曖昧な未来」を映し出す鏡として、「アン・リー」をめぐる複雑な創作の総体の中から4点を紹介する。

出品作家：M/M Paris、ピエール・ユイグ、ドミニク・ゴンザレス=フェルステル、リクリット・ティラヴァニ

展示室11前



ドミニク・ゴンザレス=フェルステル 《安全地帯のアン・リー》2000
金沢21世紀美術館蔵
© Dominique GONZALEZ-FOERSTER / Anna Sanders Films
photo: SAIKI Taku

展示室10

芸術と生命工学の交差

テレビやインターネットがそうであったように、生命工学がもたらす新たな技術は、芸術にかつてない可能性を開いている。20世紀後半から21世紀初頭にかけて登場した生物のDNAを読み書きするためのさまざまな技術は、芸術家たちにとって、新たな表現手段となっている。この部屋では、当館所蔵作品を交えて、その歴史の一部を俯瞰する。また世界中で民主化が進むバイオテクノロジーがどのような未来を作り出すのかについて考える。

出品作家：ステン・ハンセン、やくしまるえつこ、BCL、川崎和也

資料展示：ミハイル・S・ネイマン、三浦郁夫（広島大学両生類研究センター）+広島国泰寺高校生物班、リチャード・パワーズ、ジュリアン・ソレル・ハクスリー、YCAMバイオリサーチ、マッシュヴ・アタック



やくしまるえつこ《わたしは人類 ver. 金沢》2017
金沢21世紀美術館蔵
© YAKUSHIMARU Etsuko
photo: YANAI Shino

4

展示室9

In a Gamescape: REPLAY

開発環境の発展やオンラインストアなど販路の整備は、ゲームを巡る産業構造に変化をもたらし、アニメーション映画や現代美術、電子音楽など他領域からの開発者の参入を促している。つくり手が多様な「個」へと変移することで、ビデオ・ゲームは、そのメディア自体を批評的に捉え直すメタメディアとしての機能を獲得し、ゲーム内部の空間や風景、ゲームの自律性や現実世界との接続といった、これまで不可視であったゲームに内在する世界の構造を顕在化させ、さらなる拡がりをも予感させる。

出品作家：ミルトス・マネタス、ブレント・ワタナベ、Playables (ミハエル・フライ&マリオ・フォン・リッケンバッハ)、ジョセフ・デラップ、和田淳



Playables (ミハエル・フライ&マリオ・フォン・リッケンバッハ)
《Kids》2017-19

5

展示室8

深い危機の時代

この世界には、様々な人種や宗教、異なる価値観や思想をもつ人々が共存している。人種や性差への差別意識は消えることなく、貧困や飢えに喘ぐ人々はあとを絶たない。目には見えない国境が存在し、負の歴史の精算も追いつかないばかりか、繰り返される破壊や紛争が世界の人々に大きな影を落とし続けている。最先端のテクノロジーが人間の生き方や価値観さえも大きく揺るがし、人間の存在をこれまでない方法で規定していく。そんな「深い危機の時代」と向き合うアーティストたちが希望を見い出そうとする作品を紹介する。

出品作家：ヘザー・デューイ=ハグボーグ、ハウ・イーティン、ドウ・ベイシー、Hong Kong Cleanup、ムン・キョンウォン & チョン・ジュンホ、ヒワ・K、アーデル・アービディーン、ヤン・ジェンジョン、ミハイル・カリキス、柳瀬安里、エルカン・オズケン、オリバー・ピア、ツァオ・フェイ、ゲルハルト・リヒター



ヘザー・デューイ=ハグボーグ《過激な愛》2016
photo: Thomas Dexter

6

展示室7前

協働の力

世界の至る所で危機が伝えられる毎日を、どのように生き抜いていけば良いのだろうか。ペドロ・レイエスは、既存の国家国民の枠組みや、専門家だけに任せるのでは地球規模の課題は到底乗り越えられないと考え、個人が意見交換を重ねるためのプロジェクト「人々のための国際連合」を提案している。異なる文化、歴史、知恵や経験を持ち寄り、クリエイティブな方法で打開策を考えることは、真に民主主義的態度の現れである。暴力や破壊も、ユーモアを以て連帯して向き合うことで解決できるかもしれないのだ。

出品作家：ペドロ・レイエス



ペドロ・レイエス《人々のための国際連合 武装解除時計》
2013
金沢21世紀美術館蔵
© Pedro REYES
photo: KIOKU Keizo

展示室7

エコロジー、ローカリティ

エコロジー

環境汚染への反省として人間は自然に影響を与えることは許されないというエコロジー思想では、人間存在と環境は対立すると考える。しかし、「現在地」における自然と人間の関係は、すべて網の目のように繋がっていて、境界や対立はないと考えることも可能だ。自然は静謐で美しいというよりも、流動的で不穏であり、突発的で非情でもある。ジュディ・ワトソンは、大地から得た有機的な素材を作品に取り入れ、自然との間に境界を持たない。照屋勇賢の新聞を使った作品は、自然災害によって現れる非情な風土を受容しつつ、希望の兆しを立ち上げた芽に託したものだ。

ローカリティ

国家的公共性を帯びる歴史は本流として語り継がれていくが、書き残されなかった場所に帰属する事実は、流動的で開放的な時間と空間の中に断片として残されている。ティファニー・チュンは、茨城県日立市の博物館に残された資料から、歴史の超空洞となったエリアを地図で表す。エリアス・シメはPCの解体部品が集積するアフリカにあって、本来的な意味や機能を果たさなくなったワイヤーでアフリカの風景を描く。

出品作家：ティファニー・チュン、風間サチコ、エリアス・シメ、ジュディ・ワトソン、照屋勇賢



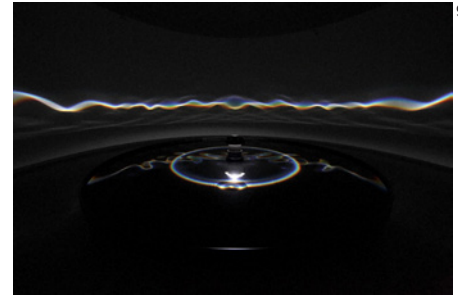
ジュディ・ワトソン
《グレートアフリカン盆地の泉、湾(泉、水)》2019
Courtesy of the artist and Milani Gallery,
Brisbane
Photo: Carl Warner

展示室14

エネルギーの伝播

光、水、色、鏡などを使い、人間が目に見える現象をどのように認識するかに関心を抱き、その認識が形成されるプロセスを探求するオラファー・エリアソン。空間そのものを変容させてしまうような、スケールの大きなプロジェクトでも知られる。《水の彩るあなたの水平線》は、水を張った円形の器の中央にHMIランプとプリズムが置かれ、踏み板と直結するハンマーが器の底を叩くと水面に波紋が広がるという作品。プリズムを通した光が、水の揺れによって、暗い展示室の壁に虹の帯を作り出すというインタラクティブな仕掛けをもつ。行為の介入によって作品全体に変化を起こすというエリアソンの作品の特徴を示している。

出品作家：オラファー・エリアソン



オラファー・エリアソン《水の彩るあなたの水平線》2009
金沢21世紀美術館蔵
© 2009 Olafur Eliasson, courtesy of the artist and Gallery Koyanagi, Tokyo
photo: KIOKU Keizo

展示室7前・展示室14周り

関係性についての考察

世界は様々な「関係」で成り立ち、日常は「関係」によって形作られている。人と人、人と物、物と物といった様々な関係について考察した作品を集めて紹介する。リジア・クラークは人が関わることで形が変わる作品を以って人と物の関係を考察し、関係を取り巻く環境にも言及した。シウド・メイレリスはそのリジア・クラークに影響を受けて、《L.C.へ》を制作。異なるサイズや素材の球を、金属製の手袋を装着して持つと感覚が鈍くなり、どの球もほぼ同じようにしか感じられない。経験上知り得た関係を覆すことで、関係とは条件や環境によって変更や更新がなされることを示した。島袋道浩の《箱に生まれて》は、鑑賞者が近づくことで箱が自身について語りだし、ギムホンソックの《これはうさぎです》は黙して動かないうさぎの正体について、横に置いてあるプラカードの文面によって語られる。

出品作家：リジア・クラーク、ギムホンソック、島袋道浩、シウド・メイレリス



ギムホンソック《これはうさぎです》2005
金沢21世紀美術館蔵
© Gimhongsok
photo: KIOKU Keizo

展示室13

身体・宇宙船・精神

この部屋では、伸縮性の高い布「ライクラ」で作られたエルネスト・ネトの作品《身体・宇宙船・精神》を紹介する。薄いピンクやグリーンで覆われた不安定な空間は、生物の内部に入ってしまったかのような、不思議な感覚をもたらす。中央にあるクッションからはハーブが香り、リラックスした状態で静かに自身の内面と対話する空間となる。

出品作家：エルネスト・ネト



エルネスト・ネト《身体・宇宙船・精神》2004
金沢21世紀美術館蔵
© Ernesto NETO
photo: FUKUNAGA Kazuo

展示室12

創造的コレクション

小さな抽斗がたくさんついたキャビネットは、抽斗をあけると音楽や誰かの声、様々な音が溢れ出し、抽斗を戻すと音が鳴り止む。抽斗毎にちがう音が仕舞われており、開け閉めによって、DJのように音を奏でることもできる。仕舞われている音は、どれも作家が収集した様々な音源からなる。美術館という場所は、このキャビネットに似ている。美術館は作品を大事に保管しつつ、しかし時には取り出して、人々の前に披露し、また作品の組み合わせによって新たな価値観を提示する。優れたコレクションは、その先の創造への糸口になる。

出品作家：ジャネット・カーディフ & ジョージ・ピュレス・ミラー



12

ジャネット・カーディフ&ジョージ・ピュレス・ミラー
《驚異の小部屋》2017
金沢21世紀美術館蔵
© Janet CARDIFF & George Bures MILLER
photo: KIOKU Keizo

授乳室前

静かな変革

演劇ユニットPort B (2002-) を主宰する高山明は、演劇を媒介にして世界をいかに受容するかという思考空間に観客を招き入れるプロジェクトで知られる。近年は、都市空間自体を劇場化し、ツアー・パフォーマンスやインスタレーションによって、現実の中で生きるプログラムによって静かな変革を目指している。「マクドナルドラジオ大学」は、世界各所にあるマクドナルドを大学に見立て、知のベルト（シンク・ベルト）を創出しようという壮大なプロジェクトである。今回は美術館の交流ゾーンにマクドナルドのような空間を創出し、参加者は講義を注文してその場で聴講することができる。教授陣は、インドネシア、台湾、イラン、シリア、ウガンダ、日本などの移民または難民と呼ばれる人々が務め、哲学、音楽、建築、生物学、自然科学、ジャーナリズムなど内容も多彩である。

出品作家：高山明



13

高山明《マクドナルドラジオ大学》2017、フランクフルト
金沢21世紀美術館蔵
photo: HASUNUMA Masahiro

広報用画像

画像1～17を広報用にご提供いたします。ご希望の方は下記をお読みの上、広報室へお申し込みください。 Email: press@kanazawa21.jp

[使用条件]

※広報用画像の掲載には各画像のキャプションとクレジットの明記が必要です。

※トリミングをご遠慮ください。作品が切れたりキャプション等の文字が画像にかぶったりしないよう、レイアウトにご配慮ください。

※情報確認のため、お手数ですが校正紙を広報室へお送りください。

※アーカイヴのため、後日、掲載誌（紙）、URL、番組収録のDVD、CDなどをお送りください。

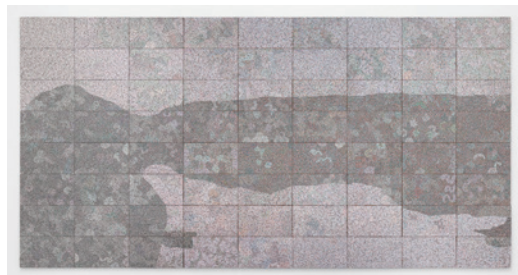
以上、ご理解・ご協力のほど、何とぞよろしくお願い申し上げます。

現在地[1]



14

ティファニー・チュン
《フンケ：常陸国風土記—常陸国》2016
Courtesy of the artist and Tyler Rollins Fine Art,
New York
© Tiffany CHUNG, 2016



15

エリアス・シメ
《網渡り：音を立てずに5》
2019
Courtesy of James Cohan, New York

現在地[2]



15

エル・アナツイ《空っぽの器》2015
金沢21世紀美術館蔵
© EI ANATSUI
photo: KIOKU Keizo



16

上出長右衛門窯+丸若屋《髷髷 お菓子壺 花詰》
2009
金沢21世紀美術館蔵
© Kamide Choemon Gama
© Maruwakaya
photo: SAIKI Taku
※現在地[2]のみ